

2019年度

【公募制推薦入学選考〈併願型〉(2日目)】

【公募制推薦入学選考〈専願型〉】

基礎素養検査

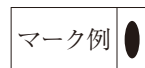
注 意

1. 選考開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は1部、解答用紙は2枚です。なお、解答用紙は、「英語」「数学」「国語」用の『解答用紙①』と「理科」用の『解答用紙②』の2種類があります。解答用紙は、選考終了後に2枚とも提出いただきますので、2枚ともに受験番号欄に記入およびマークしてください。
3. 出題科目、ページおよび選択方法は、下表のとおりです。

出題科目		ページ	選択方法
英 語		1 ～ 10	解答科目は、選択できる科目を受験票で確認のうえ、選択しなさい。
数学Ⅰ・A		11 ～ 14	
理科※	物理基礎	15 ～ 17	
	化学基礎	19 ～ 22	
	生物基礎	23 ～ 25	
国 語		国語 1 ～国語12（うしろから始まります）	

※理科については、「物理基礎」「化学基礎」「生物基礎」から2科目選択し、解答してください。解答する科目の順番は問いません。解答時間（60分）の配分は自由です。

4. 解答は全てマークセンス方式です。マークは黒鉛筆(シャープペンシル可)で右の例のように正しくマークしてください。



5. 解答用紙には解答欄のほかに次の記入欄があります。

(1) 受験番号欄

『解答用紙①』および『解答用紙②』の2枚ともに、受験番号を受験番号欄の上欄に算用数字で記入し、さらにその下のマーク欄にマークしてください。

(2) 解答科目選択欄

①「英語」「数学」「国語」を解答される方

『解答用紙①』の解答科目選択欄について、「解答をする」のマーク欄にマークするとともに、解答する科目を○で囲み、さらにその下のマーク欄にマークしてください。

②「理科」を解答される方

『解答用紙②』の解答科目選択欄について、「解答をする」のマーク欄にマークするとともに、解答する科目を○で囲み、さらにその下のマーク欄にマークしてください。

※受験番号および解答した科目が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

6. 記入したマークを訂正する場合は、プラスチック製消しゴムで完全に消し、改めてマークしてください（消しくずを残さないこと）。
7. 解答用紙は折り曲げたり、汚したりしてはいけません。
8. 解答用紙の※印欄はマークしてはいけません。
9. 問題冊子と解答用紙にページの落丁・乱丁および印刷の不鮮明な箇所や汚れなどがある場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
10. 選考終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問六

例文 A ～ C の波線部と意味用法が最も近いものを、次の各群の ① ～ ⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

例文 A 消防は火元を台所とみてゐる

- ① 痛い目をみてはじめて気づく。
- ② 料理の味をみてくれ。
- ③ 患者の脈をみてゐる。
- ④ 相手を甘くみてはいけない。
- ⑤ 子どもの面倒をみてくれる。

例文 B 借金がもとで家を失う。

- ① 口は災いのもと。
- ② もとも子もない。
- ③ もとの鞘に収まる。
- ④ 一言のもとにはねつける。
- ⑤ 事実をもとにしたドラマ。

例文 C 寒くて泣き出す。

- ① 罪を憎んで人を憎まず。
- ② 風邪を引いて学校を休む。
- ③ 朝起きて顔を洗う。
- ④ 失敗して当然のやり方だった。
- ⑤ 彼に黙ってついていく。

問七

A、B の敬語と同じ種類の敬語を、次の各群の ① ～ ⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

A お目にかかる

- ① いただく
- ② なさる
- ③ お戻りになる
- ④ 召す
- ⑤ くださる

B 弊社

- ① 御子息
- ② 拙著
- ③ お菓子
- ④ 妹君
- ⑤ 芳名

(47)

(46)

(45)

(44)

(43)

問三 A～Cの語の対義語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

- | | | | | | | |
|---|----|------|-------|------|-------|------|
| A | 建設 | ① 基礎 | ② 破壊 | ③ 設計 | ④ 施工 | ⑤ 構造 |
| B | 充実 | ① 補充 | ② 払底 | ③ 欠損 | ④ 空虚 | ⑤ 不足 |
| C | 慢性 | ① 急性 | ② 一過性 | ③ 仮性 | ④ 進行性 | ⑤ 悪性 |

(36) (35) (34)

問四 A～Cの熟語と意味的な組み立てが同じ熟語を、次の①～⑦の中からそれぞれ一つ選びなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|------|------|---|------|------|---|------|------|
| A | 実行…… | (37) | B | 国連…… | (38) | C | 第一…… | (39) |
|---|------|------|---|------|------|---|------|------|

- | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|
| ① 楽観 | ② 変化 | ③ 高校 | ④ 地震 | ⑤ 令嬢 | ⑥ 和風 | ⑦ 握手 |
|------|------|------|------|------|------|------|

問五 傍線部の慣用句の使い方が適当でないものを、後の①～⑦の中から三つ選びなさい。

- ① いつの間にか大物に取り入っていて、あいつも隅に置けないな。
- ② 多額の借金は、家族にも累を及ぼすことになる。
- ③ 友人を振り向かせようと水を向けたが、気づかなかったようだ。
- ④ たった一回の失言が、業績にみそをつけてしまった。
- ⑤ 反省している部下に、厳罰を与えてだめを押すとは、ひどすぎる。
- ⑥ 彼は、同僚の失敗を上司の尻馬に乗って非難していた。
- ⑦ 妻に欲しがっていたバッグをプレゼントして、目に物見せてやろう。

(40)

(41)

(42)

II

次の問いに答えなさい。(四〇点)

問一

A ㄱ C の傍線部と同じ漢字を使うものを、次の各群の ① ㄱ ⑤ の中からそれぞれ一つ選びなさい。

A うやうやしい

① グウゾウスウハイ

② ヒヨウケイホウモン

③ キョウジュンノ意

④ ジキシヨウソウ

⑤ 亡き母をシボする

B おもむく

① 地方にセントする

② カイガイトコウ

③ ロンシをつかむ

④ タンシンフニン

⑤ 空気のジュンカン

C つぶす

① イカイヨウ

② イコン試合

③ フンボの地

④ フンパンもの

⑤ キツモンする

問二

A ㄱ C の四字熟語の意味の説明として最も適当なものを、次の各群の ① ㄱ ⑤ の中からそれぞれ一つ選びなさい。

A 針小棒大

① 小さなことを積み重ねていくこと。

② 小さなことを必要以上に気にすること。

③ 小さなことを大げさに言うこと。

④ 目的に合わせて道具を選ぶこと。

⑤ 小さな原因が大きな問題を引き起こすこと。

B 不倶戴天

① 恨みや憎しみが強いこと。

② 絶対に負けないという気持ちがあること。

③ 強い決意でものごとを進めること。

④ いったん決めたことをやり通すこと。

⑤ 自信を持つてものごとに臨むこと。

C 明鏡止水

① 先の見通しがはっきりしていること。

② ものごとを冷静に進めること。

③ 心が静かに落ち着いていること。

④ 先の苦勞を見越してやめておくこと。

⑤ 自然の成り行きに任せること。

(33)

(32)

(31)

(30)

(29)

(28)

問九 傍線部7「『道具の生態系』」とあるが、数字に関する「生態系」の例の説明として、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

(27)

- ① 数字が存在しないとき、人間は三個以下の個数しか把握できなかったが、数字の代わりにまず身体や物が数量の把握のために使われるようになり、その数え方にもとづいて、さらに洗練された数字が開発された。
- ② 数量を把握するのに身体や物を使ってきたが、その方法がさらに計算にも使われるようになり、計算の記録方法として開発された数字を使って、複雑な計算を容易にするための筆算という一連の手続きが作り出された。
- ③ 各文明で数字が開発されたが、さらに洗練された計算用の数字、インドーアラビア数字が発明され、それを用いることで、複雑な計算を容易にするための筆算という一連の手続きが作り出された。
- ④ 古代に開発されたローマ数字は、計算には適さない数字だったが、それを洗練させたインドーアラビア数字を使って、複雑な計算を容易にするための筆算という一連の手続きが作り出された。
- ⑤ 七世紀のインドでは、すでに洗練された計算用の数字であるインドーアラビア数字が発明されていたが、筆算という一連の手続きができてはじめて、二桁の掛け算のような複雑な計算が可能になった。

問七 傍線部5「認知的な限界を補うために、人は様々な工夫を重ねてきた」とあるが、その工夫の例として適当でないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

(25)

- ① 木や骨に刻みを入れて傷をつけたり、粘土の塊を並べたりして数える。
- ② 数える対象に合わせて、手や足の指を一本ずつ折り曲げて数える。
- ③ 両手だけでなく、肘や肩、胸や腰などの身体部位を使って数える。
- ④ 数を表すための専用の記号をつくり出して数える。
- ⑤ 数えようとするものを絵に描き、その絵の個数を数える。

問八 傍線部6「多くの文明は、4もしくは5を境に、独自の記号を編み出すことにした」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

(26)

- ① 人間は、三個以下なら数えるものと一対一で対応させて記号を書くことができるが、4以上になると個数を正確に把握して対応させることが難しくなるから。
- ② 人間は、三個以下なら数えなくても正確に数を把握できるので、3以下は記号が必要ないが、4以上になると正確な把握が難しくなり、数に合わせた記号が必要だから。
- ③ 人間は、三個以下なら数えなくても正確に数を把握できるので、同じ形の記号三つまでなら早く正確に把握できるが、4以上になると、その方法が難しくなるから。
- ④ 人間は、三個以下なら見ただけで個数を正確に把握できるので、木や骨につけた傷や小石を使って数えられるが、4以上だと、そのような方法では正確な数の把握が難しいから。
- ⑤ 人間は、三個以下なら適当な記号を三つ並べても数の把握が正確にできるが、4以上になると、独自のデザインの記号にしないと、ほかの数字と区別しにくくなるから。

③ 二つのものがあると言えるためには、それらのものの間に差異を見出す必要があるが、生まれたばかりの赤ん坊にとって、どこに差異があるか見出すのは難しいということ。

④ 生まれたばかりの赤ん坊は、まだ数を数えることができないため、目の前にあるものが一つのものなのか二つのものなのか、正確に言い当てるのは難しいということ。

⑤ 生まれたばかりの赤ん坊は、母親を含む世界のものごとの間に差異を認知できないので、一つだろうが二つだろうが、自分の手や口で触れて確かめているということ。

問五 傍線部4「数」について述べた内容として、適当でないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

(19)

① 人間は、三個以下の物の個数は、すぐに正確に把握できる。

② 計算の過程や結果の記録を行うのに用いられる。

③ 人間の認知限界に合わせるように工夫して設計された記号で表される。

④ 人間は、身体や物を使って数量を操作して計算を行うことができる。

⑤ 自然数は、道具でありながら、高度に身体化されている。

問六 空欄 A に入るのに最も適当なことを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

空欄 A ① たとえば ② なぜなら ③ むしろ ④ ところが ⑤ つまり

空欄 B ① ただし ② だから ③ かくして ④ たとえば ⑤ さらに

空欄 C ① しかし ② 一方 ③ すなわち ④ だから ⑤ そのうえ

空欄 D ① ところが ② すると ③ つまり ④ というのも ⑤ そこで

空欄 E ① かくして ② もっとも ③ それなのに ④ 結局 ⑤ むしろ

(24) (23) (22) (21) (20)

問二 空欄 I 〃 X に入れるのに最も適当なことを、次の各群の ①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

空欄 I	① 過密	② 狭隘 ^{きょうあい}	③ 窮屈	④ 頭打ち	⑤ 手狭	(6)
空欄 II	① 赤裸々で緊密な	② 明快で緻密な	③ 鮮明で綿密な	④ 自明で精巧な	⑤ 率直で正当な	(7)
空欄 III	① 一体	② 同一	③ 均質	④ 合同	⑤ 連帶的	(8)
空欄 IV	① つぶさに	② しなやかに	③ 連綿と	④ なめらかに	⑤ 段階的に	(9)
空欄 V	① 集合的	② 離散的	③ 大局的	④ 排他的	⑤ 具象的	(10)
空欄 VI	① 忽然と	② 直後に	③ 一挙に	④ 瞬時に	⑤ 手早く	(11)
空欄 VII	① 痕跡	② 足跡	③ 遺跡	④ 筆跡	⑤ 軌跡	(12)
空欄 VIII	① 古今東西	② 徹頭徹尾	③ 一言一句	④ 一切合切	⑤ 森羅万象	(13)
空欄 IX	① 積年の	② 天然の	③ 人為の	④ 空想の	⑤ 自然の	(14)
空欄 X	① 試行錯誤	② 右往左往	③ 切磋琢磨 ^{せつさ}	④ 取捨選択	⑤ 艱難辛苦 ^{かんなん}	(15)

問三 傍線部1「漠と」、傍線部3「生来」の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の ①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

傍線部1	① 漠と	② 何もなく	③ 概念上	④ 目的もなく	⑤ 果てしなく	(16)
傍線部3	① 必ずしも	② すべての	③ 生まれつき	④ 本能として	⑤ 昔から	(17)

問四 傍線部2「人間の一生のはじまりにおいては、2と1とが同時に到来する」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、

次の ①～⑤の中から一つ選びなさい。 (18)

- ① 生まれたばかりの赤ん坊は、母親と常にいっしょに行動するため、別の身体を持っている自身と母親は、二人ではなく一人の人間だと認知し、行動しているということ。
- ② ものごとの間に差異を見出す前の生まれたばかりの赤ん坊は、自身と母親を含むすべての存在が一つのものであり、一つと二つの区別なく経験しているということ。

とした足し算だけで済む。この筆算の手続きのような、具体的な問題を解くための系統立った手続きのことを「アルゴリズム」と呼ぶ。筆算のアルゴリズムと人間の脳との見事な連携の結果として、いまでは誰もが簡単に二桁以上の計算ができるのだ。

このアルゴリズムそのものも、インドーアラビア数字があるからこそうまくいく。先にも述べたとおり、ローマ数字で筆算をしようとするとは厄介である。数字の洗練がなければ、いま私たちが知っている筆算のアルゴリズムが生まれることもなかっただろう。

数字という道具のまわりに、新たな道具や技術が生まれ、それが洗練されて、また別の道具や技術がつくられる。やがて数学的道具と技術が互いに支え合う豊かな生態系が形作られていく。

（森田真生『数学する身体』より。ただし出題の都合上、表現を一部改めた箇所がある）

問一 二重傍線部A～Eのカタカナを漢字で書いたときに、その漢字と同じ漢字をふくむものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

A	① 日々のタンレン	(1)
② タンセイな顔立ち	D ① カイイ文字	(4)
③ タンシヨク野菜	② イツカイの市民に過ぎない	
④ ゴウタンな若者	③ ゲンテンカイキ	
⑤ タンセイ込めた作品	④ カイサツを通る	
B	⑤ カイメン活性剤	(5)
① クツサクキを使う	E ① カンゲンガク	
② バンサク尽きる	② カンブなきまでやつつける	
③ サ克蘭する	③ カンメが違う	
④ 書物のサクイン	④ 会計のカンサ	
⑤ 税金のサクシュ	⑤ カンケツテキに痛む	
C		
① 研究にマイボツする		(3)
② 『ゲサクザンマイ』		
③ マイキヨに暇がない		
④ 幼いテイマイを養う		
⑤ シンマイの教師		

数量の把握だけではない。身体や物をうまく使うと数量を、目的に合わせて操作すること（すなわち「計算」すること）もできる。誰もが小さい頃に、指を使って足し算や引き算をしていた時期があるだろう。あるいはソロバンを使って、指だけではできない計算を、素早くできる人もいるだろう。

古代ギリシアやローマにも、「算盤（abacus）」と呼ばれる計算用の道具があった。大理石の石板にまっすぐ引かれた、何本かの線の上やあいだに小石を置いて計算をする仕組みである。英語の calculation（計算）はラテン語の calculus（小石）からきているが、それもこの時代の習慣に由来する。

物を使った計算の弱みは、過程が消えてしまうことである。石をひとつたび並べ替えると、もとあった位置関係は失われる。そこで数字を使って、計算の過程や結果を記録するようになる。物を使った計算と、数字を使った記録という、道具の役割分担が確立される。

実際、古代の数字は、計算そのものには使いにくい。たとえば、ローマ数字で計算することを思い浮かべてみてほしい。36は「XXXVI」、73は「LXXIII」、この表記を使って、どのように計算をすると掛け算の結果「MMDCCXVIII（2628）」が得られるか。試してみればそれがいかに厄介な作業かわかるだろう。ローマ数字だけではない。古代の数字はどれも、そもそも計算をするためには設計されていないのだ。

計算を物から解放し、「計算用の数字（＝算用数字）」を発明したのは、インド人である。七世紀のインドでは、いまや世界中に定着している「インドーアラビア式」の0記号を含む位取り記数法が、早くも導入されていたと言われている。それは決して

X

の歴史を通して、徐々に形作られてきた人工物なのである。

IX

産物ではなく、気の遠くなるような

包丁を使うためには、まな板や砥石といしも必要である。ある道具を使っていると、その道具を使いやすくするために、また新たな道具が生み出される。そうして、相互に依存しあう道具のネットワーク、いわば「道具の生態系」⁷ができてあがっていく。

数字の場合も同様である。道具としての数字が次第に洗練され、使いやすくなってくると、それをますます使いやすくするために、新たな道具や技術が開発される。

その最も分かりやすい例が、小学校で教わる筆算だろう。いまでこそ、初等教育を受けた人のほとんどが苦もなく二桁の掛け算ができてしまう時代だが、これは筆算が定着する以前には、考えられないことだった。二桁の掛け算など、あまりにも高度で、よほど訓練を積んだ人でなければできなかった。

現代の私たちが難なくそれをできてしまうのは、私たちが特別優秀になったからではなく、筆算の一連の手続きが、非常に巧みに設計されているからである。

たとえば「 36×73 」を計算するところを思い浮かべてほしい。二桁どうしの掛け算だが、筆算の手順が分かっているれば、その過程で必要になるのは、一桁どうしの掛け算と足し算だけだ。一桁どうしの掛け算でさえ煩わしいので、日本人は九九を暗記してしまう。そうなると使うのは言語野で、あとはちょっ

能力は消えていく。見ただけで個数を把握することは難しくなり、数える必要が出てくるのである。

そんな認知的な限界を補うために、人は様々な工夫を重ねてきた。⁵

羊の群れがいる。見ただけでは何匹か分からないので、羊が一匹通るごとに、指を一本ずつ折り曲げていく。そうして、身体の助けを借りて、羊の数を捉える。

残念ながら、指は両手で十本しかない。足の指を使つたとしても二十本だ。そこで、なんとか工夫をして、限られた身体で、少しでも多くの数を捉えようとする。

例えばオーストラリアのヨーク岬とパプアニューギニアの間にあるトレス海峡諸島の原住民は、両手だけでなく、肘や肩、胸や足首、膝、腰など、全身を使つて33まで数える方法を持つている。中世ヨーロッパにおいては、両手の指を使つて9999まで数える方法があつた。

位には限りがあるから、いずれにしても限界がある。

身体を使う代わりに、木や骨に刻みを入れて、数を数えたり、記録したりする方法もある。紀元前二万年前後のものとされるイシャング遺跡（コンゴ民主共和国）からは、規則正しく切り傷をつけられた骨片が見つかつている。物の力を借りて数を数えようとした、遠い祖先の

紀元前三三〇〇年頃になると、シュメール人の手によって、世界で最初の文字が発明される。最古の粘土板には、シュメールの絵文字とともに、数を表すための記号がある。初期の文字はやがて、表意文字や表音文字に変わっていくが、数を表す記号は、そのための専用の記号として残つた。こうして「数字」が誕生したのだ。

数字のデザインは文明ごとに多様だが、木や骨に傷をつけたり、粘土の塊を並べたりしていた延長線上で、1を表す記号を二個あるいは三個並べて2や3を表するのが基本である。それならば、4や5も、同じ記号を四個並べたり五個並べたりすればよいかというと、そうはいかない。人間の認知能力の限界のために、同じ記号が四個や五個並んでいることを、正確に把握すること自体が一苦労だからである。そのままでは、道具としての使い勝手が悪い。

⁶
D 多くの文明は、4もしくは5を境に、独自の記号を編み出すことにした。たとえば漢数字の場合には、一、二、三の次が「四」になる。

ローマ数字もI、II、IIIの次が「IV」になる。アラビア数字も、もともとインドから伝わった記数法で、2、3までは、漢数字の「二」や「三」に似た形を草書体で書いたものが、「4」からはやはり新しい形になる。数字は

VIII

、人間の認知限界に合わせるように工夫を凝らして設計されてきたのだ。

E

身体各部位や小石などの物、さらには外部メディアに記録された記号等を用いることで、離散的な量を把握する人間の能力は、少しずつ拡張されていく。

人はやがて世界に向かって、言葉を発するようになる。昼と夜が区別され、嬉しいと悲しいが分離され、こことあそこが呼び分けられるようになる。言葉はまた言葉を生み、差異がまた新たな差異を生む。こうして、世界の分節化は、留まるところを知らずに進む。

あるとき人は、数を数えはじめるようになった。

1、2、3、4、5、6、7、……。

数は、無限の差異に、名前を与える。

身体が経験する世界は、連続的でアイマイだ。皮膚が感じる温かさと冷たさ、耳が聞き取る音の高低や強弱、全身で感じる喜びや悲しみ……どれをとってもそうである。この瞬間からは冷たいとか、いま喜びから悲しみに変わったとか、そういうはつきりとした境界があるわけではなく、弱い方から強い方へ、あるいは小さいものから大きいものへと、世界は徐々に、IV 移り変わる。

一見 V に思える「個数」の認識として、その例外ではない。1億3000万の人がいると言ったり、111本のマッチ棒があると言ったりするのは、私たちが数を用いることができるからであって、数をバイカイし^Dない数量の経験は、もつとずつと漠然としている。111本のマッチ棒も120本のマッチ棒も、見た目にはおおよそ同じで、どちらも50本のマッチ棒に比べれば多くて、200本よりは少ないという、せいぜいそのくらいの認識ができる程度である。私たちが、個数の差異を厳密に把握できるのは、数の助けを借りているからであって、生来³人間にその能力が備わっているわけではない。

⁴数^Eは、人間の認知能力をホカンし、延長するために生み出された道具である（以下、数の道具としての側面を強調するときには「数^E」と書くことにする）。「自然数 (natural number)」という言葉があるが、それは決してあらかじめどこかに「自然に」存在しているわけではない。「自然」と呼ばれるのは、もはや道具であることを意識させないほどに、それが高度に身体化されているからである。

数^Eで武装していない人間は、いくつまでならば個数の差異を正確に把握できるのか。

人間は少数の物については、その個数を VI 把握する能力を持っている。赤いものが赤いということがわかるのと同じように、二個のものは二個だとだちにわかる。心理学の世界で「サブタイゼイション (subitization)」と呼ばれるこの能力の背景にあるメカニズムはいまだ完全には解明されていないが、近年の認知神経科学の研究によると、三個以下の物の個数を把握するときには、それ以上の個数を把握するときとは違う、固有のメカニズムが働いているらしい。

人間は何らかの方法で、三個以下の物については、数えなくてもその個数を、正確に認識できるのだ。

A

、四個あたりを境にして、この

国語

(解答番号

(1)

)

(47)

)

I

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(六〇点)

数字が、子どもの頃から好きだった。

子どもの遊び場には、立ち入り禁止がたくさんある。海もブイの先まで泳げないし、公園も柵を越えられない。「この先は行き止まり」が決められた中で遊ぶのは、いつもどこか

I

だった。

その点、数字は広い。どこまでもどこまでも続いていて、行き止まりも、立ち入り禁止もない。誰も行ったことのないところまで、好きなだけ進んで行ける自由があった。それでいて、ただ漠¹と広いというのではなく、ひとつひとつの数がはつきりしている。

赤い絵の具と青い絵の具を混ぜると、毎回違った紫になるし、晴れの日の朝のオレンジジュースは、毎回少しずつ甘さが違うのに、7に8を足すといつも15で、15は14や16のすぐそばなのに、やっぱり7足す8はちゃんと15で、そんな数字の

II

自由が、好きだった。

人が数を数えるようになったのは、いつ頃のことなのだろうか？

「ここに二つのものがあります」

誰かが、そう言ったでしょう。このとき、どこに、いったいどのようなものがあるのかはわからないけれど、そこに差異があること、少なくともその言葉が発した人が、そこにひとつの差異を見出していることがわかる。

生まれたばかりの赤ん坊は、母と宇宙と文字通り

III

で、その世界に^A差異はない。赤ちゃんにとっては母もまた自分自身であり、母乳

も内から来るものとして認知されるという。一切の差異が生まれる以前の、タンテキな存在の充満の中を、赤ちゃんは全身で動きまわり、手や口でタンサ^Bクする。そこに触れる母の乳房の感触や、自分自身の皮膚の手触りを経験しているうちに、あるときふと、母が「私」ではない、ということに気付く。存在の海に差異の亀裂が走り、「私」と「世界」とが立ち上がる。

数学では、まず1があり、それに2が続くけれど、人間の一生のはじまりにおいては、2と1とが同時に到来する。²

ご注意

1. 本書の一部あるいは全部について，発行者の許可を得ずに，無断で複写・転写することは禁じられています。
2. 本書の内容に誤り・誤字脱字などございましたら，ご連絡いただけると幸いです。

2019/7/1

発行・制作:広島国際大学入試センター

連絡先:739-2695 広島県東広島市黒瀬学園台555-36

TEL: 0823-70-4500 FAX: 0823-70-4518

Mail: HIU.Nyushi@josho.ac.jp

URL: <http://www.hirokoku-u.ac.jp/>

Copyright © 2019 Hiroshima International University, All rights reserved.
